

相模湾における定置網型の変遷 1

平 元 泰 輔

Historical changes of set net type in Sagami bay 1

Taisuke HIRAMOTO[#]

はじめに

定置網には、いろいろな部分の名称があり、それを覚えるのに相当な時間を要する。標準名は文献などで分るが方言で、例えば「ロケイ」、「二号前」、「カスガイ」と言われても直ぐにはわからない。そのほか、地方によって同じ部分でも名称が異なる場合がある。それ等から考えると、定置網はかなり以前から全国的に操業されていたと思われ、沿岸漁業の大宗と言われた所以もそこにある。しかし、定置網はこのように長い歴史を持ち、これまでも、いろいろな問題点を漁業者や研究者に投げつけてきた。全国的に定置網に関する研究が組織化されたのは、1927年(昭和2年)に日本定置漁業研究会の設立からであり以後、定置網の研究は全国的規模で開始された。この会の機関誌である「定置漁業界」は1927年(昭和2年)3月に第1号が刊行され、太平洋戦争の厳しくなった1944年(昭和19年)7月の第53号をもって最終号になったが、定置網の関係者に多大な貢献をした。その機関誌をみると、その当時の人々は例えば、その網型が大漁を続けても、それだけで満足せず網型や漁具漁法の面で新しい改良を重ね、色々な問題点を出し続け、その解決に大変な努力をしてこられたことが、生々しく記述されている。太平洋戦争が終わると日本定置漁業研究会の後継者といえる日本定置漁業協会が設立され1954年(昭和29年)に機関誌「ていち」が発刊された。この「ていち」も「定置漁業界」と同様に多くの報文や情報が掲載され、現在85号まで発行されている。

このように長い間、定置網に関する報文や情報を民間団体が発行している業界は他に無いと思う。しかし、現在の定置網漁具は計器類の導入や省人省力化が旋網、曳網などの計器漁法と比較して遅れてい。しかし、このことは定置網がまだまだ発展することを意味している。

報告者¹⁾や柴田²⁾は、垣網に当たった魚群が、全て箱網で漁獲出来る定置網漁具に一步でも近付けるため、網内外に魚群探知機を配置し映像変化等で魚群行動を調査したことがあるが、その結果は、約3割程度の魚群が網外に逃避することが認められた。上述のことからも、我々は10割の漁獲を得るための知識や情報を持つには未だ程遠くこれまでの7割の漁獲を得ることについては、先人の力が大きく寄与してきた。そこで我々の先人が定置網を改良、改善する場合どのような意欲、考え方を待っていたのかを知ることは、我々が網型を改良する場合の指針ともなるので、本報では相模湾における定置網の網型の変遷について取り調べたので報告する。

なお、網型の変遷は、漁具、漁法の改良、改善もその範疇にいれることが出来る。

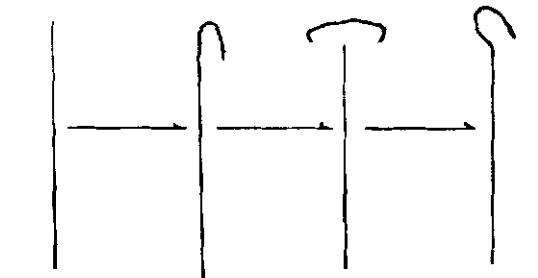
本報を取りまとめるにあたり、元東京水産大学教授小倉通男博士に校閲して頂いた。心から感謝の意を表す。本報を執筆するにさいして絶えず激励して下さった本場の資源研究部木幡孜部長および清水詢道専門研究員に感謝の意を表す。

1. 我が国及び本県における定置網の創設

我が国の定置網に於ける台網の起源については、山口県を発祥地として西南方面へ伝わった山口系、富山県を発祥地として北陸方面へ伝わった富山系、宮城県を中心に東北、北海道方面へ伝わった宮城系の三系統がある³⁾。

この台網類は身網の形状から大敷型と大謀型に分類される。北陸系の藁台網は西南系の大敷網、北海道・東北方面の行成網とともに大敷型に属する。大敷型は身網の形状が三角形に近い梯形また拋物形をなし、下辺の全部が開口して網口をなすもので⁴⁾、魚捕り側には台と呼ぶ特別の台浮子があり、富山系のものは台網とよばれた⁵⁾。この台網は、天正・慶長年代には敷設されていたといわ

れ「魚津浦沖之網漁史」によると、今から約530年以前に能登の島の津村から魚津に伝わりいろいろ工夫されたと記述されている⁶⁾。富山県における定置漁業の沿革をみると⁷⁾、沿岸漁業の漁法は手取りから始まり竿釣り、延縄、地曳網、瀬曳網、刺網といろいろ発達したが、なかでも刺網は後年、定置網に発達したものと考えられており、始めは一字に使用していた網型を丁字型に変形して敷設し、さらに変化して台網が考案されたものと伝えられている(図1)⁷⁾。(図2)に示す藁台網は大敷網の



一直線式刺網 曲り式刺網 T字式刺網 原始定置網
図1 刺網から定置網への改良

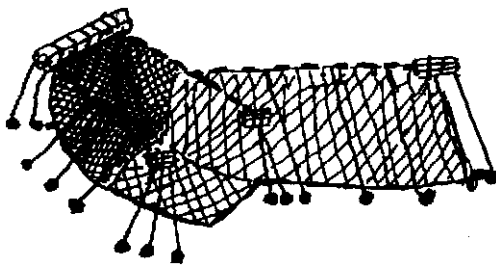


図2 富山県の小台網(1650年)

小型のものと言ってよいであろう。本県の定置網の創設は1804年(文化元年)⁸⁾で他県に比較して早くはなく、三重県とほぼ同時期⁹⁾である。また、本県で創始したものではない。網型の変遷を述べる前に相模湾における定置網の部分名称(方言)について解説する。この方言は慣れないとなかなかわからないが、「ネコゼ」とは根子才網、「サンゾウバリ」とは三艘張網、「ヨソバリ」とは四艘張網のことである。また、「ロケイ」は沖側の側張り、「二号前」は運動場の地側の側張り、「カスガイ」は、運動場の横切りのことである。

富山県の台網が本県に導入された動機は、加賀の人で宮山藤七氏が1804年(文化元年)に静岡県伊豆山で「根子才網」を張り好成績を得たことから¹⁰⁾、その影響で真鶴の田代氏の先祖が根子才網を高浦漁場に張ったのが創始であると伝えられている。(高浦漁場は現在も操

業している)この根子才網は長い間に漁業者言葉が訛って「ネコゼ」となったのではないかと考えられる。「サンゾバリ」や「ヨソバリ」については、三艘張網や四艘張網が実際に操業されていた場所であり、そのような場所には魚が多く集まるから定置漁場としても成立するし操業が可能になる。

しかし、張網漁場として操業した場合には、1~2魚種程度を漁獲するのが精一杯であろう。そうして、以前から使用されていた漁具名を付けて根子才網を三艘張網とか四艘張網とか呼んだのではないかともおもわれる。宮本³⁾は小規模の大敷網類のなかに神奈川、静岡のこれらの網を三艘張根拵網という名称であげている。新しい漁具である根子才網を張る場合、漁獲実績のある場所、即ち三艘張網、四艘張網の漁場を譲り受けたり、借りたりして中層魚、底層魚の漁獲が可能になったと思われる。その網は来遊して来る全ての魚類が対象となるため一名「地獄網」とか「根拵網」と呼ばれた。特に「根拵網」は根こそぎ魚を漁獲したから、その名称が付いたと言われている(図3)。また、この名称について一説には、使用する操業船の隻数によって名称がついたとも言われて四隻で操業する定置網を四艘張網と呼んだようである。

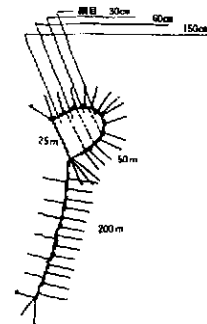


図3-1 根子才網の平面図(山田 1967)

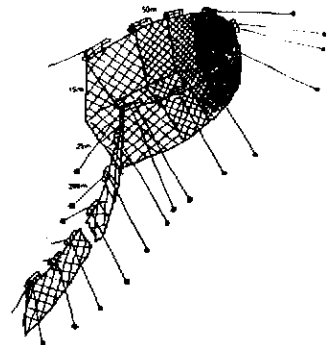


図3-2 根子才網の見取図(図3-1 平面図から著者が作製)

同じく真鶴の五味氏は、この網を真鶴岬の北側に張り、現在の古網付近や岩漁場付近で操業したが1805年（文化2年）1806年（文化3年）と連続して風浪や潮海流により網を流失した。そこで、五味氏は網を張る付近の海底地形、潮海流を研究し、それ以後は、好漁を得たと伝えられている。

当時の網規模^{8) 11)}、漁具資材、張り立て、水深等を資料からみると、網地は藁縄網、浮子は竹材や桧材、碇は土俵で一部に木碇を使用していた。身網の水深は15m、長さは60m、端口は20～25m程度、垣網200m程度であった。

身網の目合は150cm～60cm～30cm程度の細目、魚捕り部は藁のミゴ縄、木綿網が使用されていた。垣網の目合は、150cmで現在では考えられない大きさのものであった。このことは、その当時150cm目でも魚の誘導はできることを意味している。また、魚群が多いことも要因としてかんがえられる。

操業が馴れるに従い次第に深いところに張り立てられて行った。漁期は7月～11月で、その間ソーダカツオを主としてアジ、ワラサ等を漁獲したとある。漁期の7月～11月は、台風の時期にあたりこのような網型では相当な被害を受けることが予想されるが波浪等によって被害がでても簡単な網型あるからすぐに張り立てが出来たのかもしれない。

2. 網型の変遷

1) 根子才網(1804年～1900年、文化元年～明治33年): この網は運動場が無いので、箱網に入った魚群は魚捕網に当たると再び端口方向へ遊泳し網外に逃避する。そのため魚見が必要であった。

富山県の台網類と違って台浮子が無いので魚捕り部分の碇を打つことは相当な技術を要求されるが、この網は当時の他の漁具漁法より漁獲効率が良かったため真鶴から石橋までの間に10漁場が敷設されたと言われている。敷設場所と敷設は年次はとおりである¹¹⁾。真鶴村字古網1824年（文政7年）、門川村1834年（天保5年）、早川村字馬乗～字向口下1849年（嘉永2年）、江之浦村松崎～マシケ1857年（安政4年）、真鶴村字新網1858年（安政5年）真鶴村字沖網1861年（文久元年）、米神村産尻1866年（慶応2年）、岩村大根～沢尻1869年（明治2年）根府川村大根先～山ヶ下1870年（明治3年）、石橋村杉下1876年（明治9年）次の網型として、この間天保大網、大敷網が出現しても、この網型は、90年にわたり根子才網、根拵網、地獄網、または三艘張網、四艘張網の名称で操業された。図5は1980年（明治33年）の酒匂川から

山王川までの間に敷設された漁場図である。初期の根子才網とは相当網型が異なっている。

2) 天保大網(1830年～1912年、天保元年～大正元年): 1830年（天保元年）に（図4）と呼ばれる網が伊東の

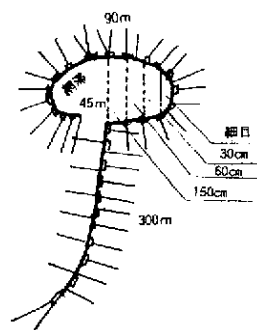


図4 - 1 天保大網の平面図（山田 1967）

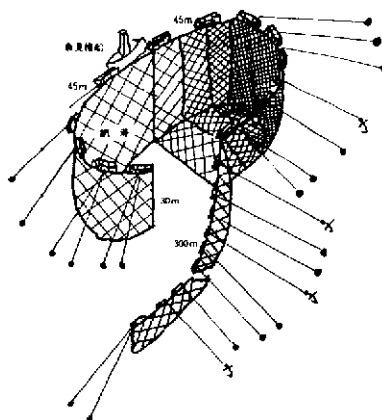


図4 - 2 天保大網の見取図（図4 - 1 平面図から著者が作製）

新井村から導入されている。この網については「神奈川県定置漁業史資料、明応年間より慶応年間」から引用してみる¹⁰⁾。『天保網と唱えるは仙台遠島の海辺用いる處の網也。此の網の起りは天保元年奥協遠島より統領の者兩人を呼びて新井村の沖夕端と言う處に張る。その網は前の根子才網より網の口も奥行もよし、小なれども懸出し網多く海へ者見台の矢倉を建て魚群を遠見す。其の矢倉の上二三人ありて魚群網中に入れば網口を引上げ陸に居る者にのぼりを立て案内す。陸に有者其ののぼりの立ちやうにより魚の多少を知り早く船にて網の處に来たり。船三艘にて網を取り魚執の處迄めぐりつめさせ魚おば取る也。三月の彼岸時分より七月土用盆前限り海上の穏やかなる時に張る網』云々とある。

この天保大網が1830年（天保元年）から神奈川県で張られた場所は真鶴、福浦、門川（現、湯河原高校の沖）

の3ヶ所である、この網の特徴は、現在の運動場とも言える所に網滞と呼ばれる網があることで、入網魚群の網外への逃避を防いで居残り率を高めた、これは大きな改良である、次に1836年（天保7年）に福浦村から浦方役人に出された届け書を紹介する。

『当村、大網今二十日網卸任候付
 此段恐以書付御次注進奉申上候』
 天保七丙申年二月
 浦方役人 様

福浦村
 名 主
 組 頭
 百姓代

これによると、網の張込みを役人とどけることは、福浦村がこの網の権利を持っていたことになる。当時、根子才網より進んだ天保大網が真鶴岬より南側の3漁場だけにとどまり、北側に伝わっていない。

静岡県には、その当時、伊豆山の2ヶ統を始め熱海、初島、網代、湯川、和田、新井、川奈、富戸等計15ヶ統が張られていた。天保大網の張り立て水深は45m、網の

長さは90m、端口30m、垣網300mで、根子才網に比較して大きく目合はほぼ同じである。また、網の中央部に矢倉船を付けて魚群の入網を見張った。この天保大網は、約50年程遅れて江之浦村羅崎、真鶴村の新網、同じく宇沖網米神村の窪尻、岩村の沢尻、岩村の大根先、石橋村の杉下に張り立てられた。

この網型は、大謀網型の原型とも言えるものである。

3. ま と め

1803年（文化元年）から1912年（大正元年）までの本県における定置網型の変遷について記述してきた。この間に出現した網型は、3種類で根子才網と天保大網及び大敷網であるが、大敷網の出現は1909年（明治42年）であり、ここでは触れてない。根子才網と天保大網について網型の大きな違いは、天保大網が網滞と言われる運動場様式の網をつけたことで、これらの網型はいずれも静岡県や宮城県から導入された網型である。しかし、根子才網型の初期と末期では網型（図1及び図5）が相当変化しておりこのことは、海底地形や魚の行動を研究した結果と評価したい。

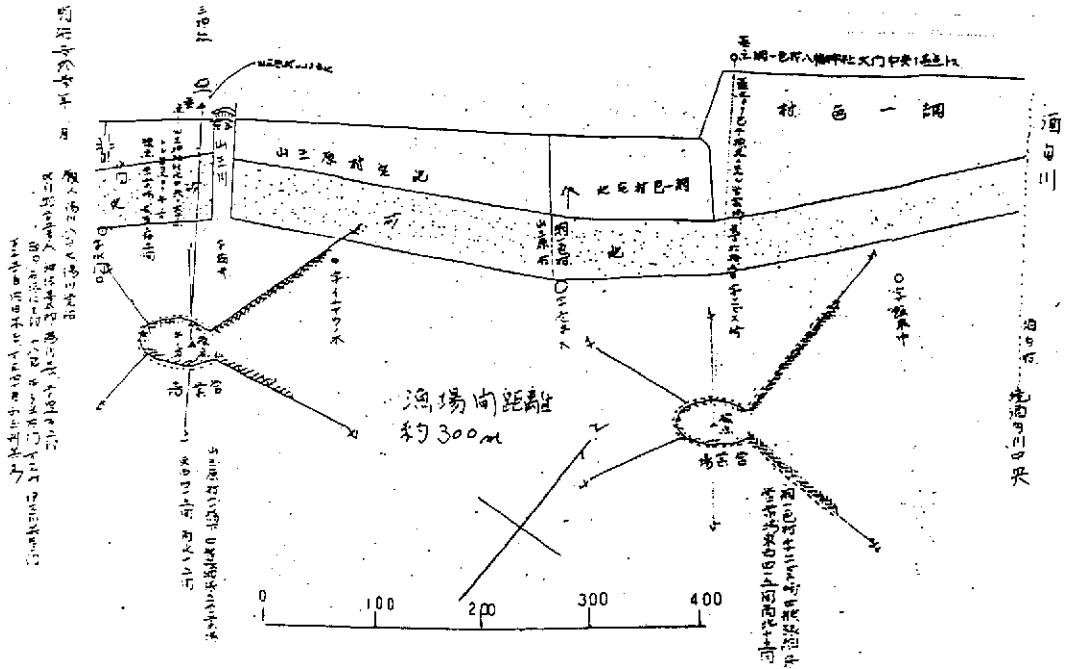


図5 改良根子才網（1900年）（本多康宏氏提供）

大敷網が出現するまで、定置網に固有名は付けられていない。天保大網の設置水深ならばブリが来遊する網立であるが、報告者の持っている資料ではブリの漁獲された記述はない。しかし、根子才網が大敷網、天保大網が大謀網の基礎になつていることは確かなことであろう。「相模湾における定置網の変遷 2」では大敷網から現在の2段箱網式落とし網及び小網について報告したいと思っている。

文 献

- 1) 平元泰輔:(1967) 定置網の網内における魚群行動調査, 神奈川県水産指導所事業報告, 7, 66~79
- 2) 柴田勇夫:(1968) 道合漁場における魚群行動調査, 神奈川県水産指導所事業報告, 8, 138~148
- 3) 宮本秀明:(1954) 定置網漁論, 河出書房, 1~29
- 4) 日本学士院日本科学史刊行会:(1959) 明治前日本漁業技術史, 日本学術振興会, 359, 397~398
- 5) 山口和雄: 日本漁業史, 東京大学出版会, 200
- 6) 島藤左衛門:(1965) 魚津浦沖之網漁場史, 1~6
- 7) 富山県定置漁業協会:(1961) 富山県定置漁業史, 1~11
- 8) 山田忠一:(1967) 落とし網まで人智の歩み, 近代水産18号, 19~23
- 9) 三重県定置漁業協会:(1955) 三重県定置漁業誌, 1~4
- 10) 神奈川県定置漁業史:(明応より慶応まで) プリント
- 11) 神奈川県教育委員会:(1970) 相模湾漁携風俗調査報告書, 226~227